ゆう薬局

「ゆっくりでかまいませんよ」、会話で築く人間関係

「認知症になっても地域で安心して暮らせるように」。左京区にあるゆう薬局の管理薬剤師Bさんは、そんな思いで地域医療の認知症支援に取り組み、厚生労働省の全国事業である「認知症サポーター」としても活動中です。きっかけは80代でひとり暮らしの認知症の女性、佐藤さん（仮）との出会いでした。

ゆう薬局へ、最初はヘルパーさんと一緒に訪れた佐藤さん。薬代の支払いに手間取ってしまい、「どんくさくてごめんなさい」と、サイフを握りしめて涙をぼろぼろ流したそうです。Bさんは「ゆっくりでかまいませんよ」と応じながら、佐藤さんがうつむいたまま、暗い表情だったのが気になりました。

その後、ひとりでゆう薬局に訪れるようになった佐藤さん。やはり金銭授受が苦手で、百円玉を数えるのに時間がかかります。Bさんは明るく「ゆっくりでかまいませんよ」と声をかけ続けました。顔をあげて笑顔になってほしい。そんな願いからでした。

ゆう薬局の薬剤師にとって、薬で患者さんの体調がよくなっているか、適切な服用がなされているか、副作用がないかを確認するのも大切な仕事です。Bさんと会話を重ねるうちに佐藤さんもうちとけて、昔の仕事といった身の上話までするように。なによりニコニコと、見違えるように明るくなったのが、Bさんにとってうれしかったと言います。

「認知症の人は、起こった出来事は忘れても、感情は忘れません。本人自身も『なにかおかしいな』『人に迷惑をかけているのでは』と、不安を感じています。そうした気持ちを理解して接することが大事なんですね」。

実は、街にある保険薬局は、医師や介護士とはまた別の、普段の生活のなかで患者さんを見守る貴重な役割を担っています。Bさんは昨秋、近所の中学校で認知症について講演。まわりの理解と知識があれば、認知症になってもおだやかに、不安なく暮らせることを、中学生たちに伝えているそうです。

年齢を重ねても健康でハッピーでいてほしい。それがゆう薬局の薬剤師の願いです。「ゆっくりでかまいませんよ」の言葉がけには、そんな思いが現れているのです。

ゆう薬局 ハンケイ500m物語 vol. 02

なんでも相談できる「ゆう薬局」には、お客さまとの物語があります。

豆知識

認知症と薬局・薬剤師

同じ商品を何度も購入。これは認知症の初期症状の可能性も。認知症も早期発見が重要。かかりつけ薬局ゆえの気付きを、医師や家族へ繋いでいます。

ゆう薬局グループ本部・宇野薬局

☎075-771-1690（本部）
京都市左京区浄土寺下馬場町106
もよりバス停は「錦林車庫前」

KBSラジオ
“サウンド版ハンケイ500m”
の番組内にて、ゆう薬局の
ラジオドラマを放送中！

毎週土曜17時～18時！